

南国の青い空と椰子の木に囲まれて ～ マレーシア・ジョホール日本人学校 ～

前ジョホール日本人学校 教諭

旭川市立啓明小学校 教諭 倉 博之



1. はじめに

平成16年度から18年度までの3年間、在外教育施設派遣教員として、マレーシア・ジョホール日本人学校に勤務し、たくさんの貴重な体験をさせていただいた。北海道とは異なる熱帯雨林の気候、多民族が互いの宗教や文化・生活習慣を見事に融合させている暮らしや街並み、そして、そこで出会った多くの人々とのふれあいは、何物にもかえがたいものとなった。

今回は、これらの貴重な経験を現地での様子やジョホール日本人学校の様子に視点をあてて紹介したいと思う。

2. 現地の様子

(1) 成長を続ける多民族国家 マレーシア

マレーシアは、東南アジアの中央部に位置する熱帯の国で、南シナ海をはさんでマレー半島の南半分(半島マレーシア～西マレーシア)とボルネオ島の北西海岸地域(サバ州・サラワク州～東マレーシア)からなっている。日本よりやや狭い国土に約2600万人が暮らし、マレ

ー系・中華系・インド系からなる多民族国家を形成している。

気候は、高温多湿の熱帯雨林気候で、日本のような季節の変化はほとんど認められない。赴任1年目には、変化のない周りの風景に多少のとまどいを覚えたが、雨期と乾期があり、雨期にみられる雷を伴った激しいスコールには驚かされる。まさに「バケツをひっくり返したような」という言葉がぴったりとくるような雨である。また、雷の激しさも経験したことのないような激しさであった。太いはっきりとした閃光をともなった稲光と、耳をつんざくような音はすさまじいものがある。年間の平均気温はおおよそ30度であるが、夜間や早朝にかけては涼しくなりしのぎやすくなっている。

マレーシアは、15世紀にマラッカ王国が成立して以来、数カ国の植民地支配を受けたが、1957年に独立を果たし、それ以来、民主主義体制をとり、民族間の融和をはかりながら、健全な経済発展を遂げている。特に、前首相であるマハティール氏が在任中には、行政中心地プトラジャの建設、ツインタワー建設などをはじめとして、多くの業績を上げ、ASEANの中でも重要な地位を築いている。

また、ルックイースト政策により、日本との結びつきも一段と強



繁栄の象徴と言われるツインタワー

くなり、互いの経済関係は著しく緊密化していると言ってよい。「WAWASAN2020」(2020年までにマレーシアを先進国にするというビジョン)は現在の首相に引き継がれ、過去の実績を背景に経済開発を軸とする国造りに積極的に取り組んでいる。

首都は近隣地区を加えた人工が約200万に及ぶマレーシア最大の都市、クアラルンプール。在留邦人は、マレーシア全体で約1万3000人、日系企業は約1200社にのぼると言われている。

(2) 国境の街・南の玄関 ジョホール・バル



ジョホール・バルのランドマーク時計台

ジョホール日本人学校があるジョホール・バルは、約250万人が暮らすジョホール州(四国とほぼ同じ面積)の州都で、人口約100万人のマレーシア第2の都市である。日本が史上初めてサッカーのワールドカップ出場を決めた「ジョホール・バルの歓喜」としてその名を記憶にとどめている人もいるだろう。マレー半島の最南端に位置し、南をシンガポールと国境を接する国境の街である。日本にいると感じることができない国境というものを大変身近に感じることができる街である。

シンガポールを結ぶコースウェイと言われる水道橋は、マレーシアとシンガポールを行き来する車・トラック・バス・バイクなどでいつも混雑している。曜日や時刻によって差はあるが、

混雑時には両国のイミグレーション(税関)を通過するために大渋滞が起きる。特に、バイクの量は圧巻である。この渋滞を緩和するために1998年にはセカンドリンク(第2コースウェイ)が完成し、南北ハイウェイともつながったが、大きな効果は生まれていないようである。このコースウェイの建設のほとんどは日本の建設会社によるものである。

ジョホール・バルは、マレーシアの南の玄関として交通の要所ともなっている。ジョホール・バル駅は、マレー鉄道やシンガポールからタイのバンコクまでを結ぶ国際特急オリエントエクスプレスの発着所として知られている。また、日本人学校近くのパシル・グダン港は、工業港として栄え、近隣には多くの日本企業がある。ラーキンバスターミナルからは、ペナン・KL・マラッカなどのマレーシア各地に向かうバスが発着する。また、シンガポールやタイに向かう国際線もある。

多民族国家であるマレーシア。ジョホール・バルでも、マレー・チャイニーズ・インド系の人々が互いの宗教・文化・生活を尊重しあいながら生活している。それぞれの民族の祝祭日は、国全体がお休みとなり、それぞれの文化を共有しているように感じられる。マレー系の人々は、その3分の2がイスラム教徒である。ジョホール・バルにも、モスクと呼ばれる寺院が点在し1日に5回あるお祈りを呼びかける放送と音楽が街に流れる。イスラムの国にいるんだという実感を呼び起こしてくれる瞬間である。また、女の人々は、イスラム教の教えにより、パジ



アブ・バカルモスク

ジュクロンという服を着て、髪の毛をトゥドゥンという布で隠している。

ジョホール・バルは、チャイニーズ系の人た



パサの様子

ちを多くみかけることができる地域でもある。街のあちこちには中国風の住宅や中華料理の店が軒を連ねている。中国のお正月チャイニーズニューイヤーには、ライオンダンスやドラゴンダンスがにぎやかに踊られている。

多くの庶民の生活を支えているのがパサ（市場）である。野菜や魚、肉、果物など食料品をはじめ、日用品等を買っているパサもある。とても活気があり、見ていて楽しいところである。いろいろな地区にパサがあり、たくさんの人でにぎわっている。

（３）現地の教育環境

多民族国家であるマレーシアには、マレー系の学校、チャイニーズ系の学校、インド系の学校があり、それぞれに独自の教育文化を形成している。しかし、児童生徒の数に対して校舎の数が不足している現状は同じようである。午前と午後の２部制をしき、児童生徒を入れ替えて対応している学校がほとんどのようである。チャイニーズ系の学校は、国の施策として、複数の教科を英語で学習することが義務づけられるようになった。日常の社会生活に必要であることにも加え、マレー語と合わせた複数言語を習得している人々が多いのは、こうした教育環境による部分も大きいようである。



現地チャイニーズ系の学校

３．ジョホール日本人学校の様子

（１）学校の概要



在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校は、ジョホール・バルの中心地から北東に約 25 km 離れたスリアラム開発地区にあり、静寂で学習に適した環境にある。20,238 m²の敷地内に、校舎、体育館、プール、運動場等の施設・設備を有し、小・中学部併設校である。1997年に当時の文部省より許可を受け設立、翌年には現在の校舎に移転され、昨年度開校10周年を迎えた学校である。昨年は、節目を記念して盛大に記念行事がおこなわれている。開校以前、当地に暮らす児童生徒は、シンガポールの日本人学校に通い、通学時の渋滞によって大変な苦勞をしていたと聞いている。毎朝6時に国境を越え、帰宅は夜7時、8時を超えることもあったそうである。そうした子どもたちの苦勞を何とか改善してあげたいという関係者の願いと努力が開校に結びついたと聞いている。

昨年3月時点の児童生徒数は、小学部110名、中学部35名の合計145名となっている。各学年1クラスの中規模な小中併置校である。近年の児童生徒数の現状としては横ばいの傾向と言える。高学年から中学部の児童生徒数が減少傾向なのに対し、低学年の児童数が増加傾向である。企業駐在員の若年化が進んでいると思われる。

学期は日本のほとんどの学校と同じ3学期制で、日本の学習内容に加えて現地ローカルスタッフによる英会話の学習が行われていること

や、現地の祝祭日を休業日としているための授業日数減に対応することもあり、週の授業時数はどの学年も日本よりも数時間多くなっている。

登下校は、6台のスクールバスを保護者母体のバス運営委員会が運行している。また、他の日本人学校と同様、給食はなく、また水道水も飲用としないため、児童生徒は保護者の手作りの弁当と水筒をもって登校している。日本食レストランの弁当を注文する事もできるため、それを利用する児童もいる。

教員は、日本からの派遣教員が管理職も含め14名、現地採用スタッフが英会話4名、養護担当1名、事務職員4名となっている。この他スクールバス運転手6名とセキュリティスタッフが24時間常駐し安全管理に万全を期している。

(2) 現地での実践から

現地校との交流

【国際交流活動】



ジョホール日本人校では、現地マレー系の学校(TMRT1校)と年2回の交流活動を毎年続けている。

TMRT1校は、児童数1100名程度のごく一般的な公立小学校である。日本人学校とは車で約10分くらいの距離にある近隣校である。前述の通り、午前と午後で学年が入れ替わって授業を行う2部制をとって運営されてい

る。児童は、日本人学校の子もたちとの交流をととても楽しみにしており、民族舞踊や色々な遊び等で歓迎してくれる。



伝統舞踊シラットでの歓迎

~かかわりを広げ、深める交流活動を~

毎年おこなわれている交流活動を、より充実した活動にし、日本人学校の児童にとって実りある現地交流の時間にと考え、パートナーを決めた交流を試みた。1対1の交流である。これまでの活動でも、互いの学年の人数は同じにしたり、交流全体の中で、活動によっては1対1の場面も無いわけではなかったが、出会いから別れまでの活動全体を通して、1対1の交流をするのである。不安な要素もあった。会話の手段は英語と片言のマレー語。特に転入間もない児童にとっては大変な時間になるのではとも考えた。しかし、そんな心配はすぐに吹き飛んでしまった。

1回目の交流は、日本人学校の児童が相手校に出かけての交流である。歓迎式の後、パートナーとの出会い。すぐに互いに握手をする子、照れくさそうに顔を見るようで見ていない子、緊張の面持ちの子・・・出会いの様子は様々であったが、マレーダンスを教えてもらう交流の時間に入ると、どの子もうち解けた様子に変化していた。ダンスという内容が、言葉だけでない動きを伴った活動であったために、身振り手振りでの交流ができ、安心感を与えたせいもあるが、それよりも現地校のパートナーの児童が常に自分に寄り添って交流を続けてくれたこ

とが大きな要因であった。

< 1回目の交流を終えた児童の感想から >

- ・いつもそばにいてくれた。
- ・トイレや手洗いの場所を教えてくれたり、そこまでついて来てくれたりとても優しくかった。
- ・ダンスをていねいに教えてくれた。
- ・ずっとにこにこしていてくれて、話しかけてくれた。
- ・ダンスがのりのりだった。
- ・カーリーパフ作りの時、分かりやすく教えてくれた。



現地校との交流の様子

2回目の交流は、SKTR 1校のみんなを日本人学校に招いての交流である。1対1のパートナー交流で充実した時間を過ごした1回目の交流をもとに、今度は自分たちがどんな風に迎えるのかを、みんなが真剣に考えた。

< 2回目の交流で大切にすべき事は何? >

- ・相手の気持ちを大切にしたい。わかる英語は使って頑張りたい。内容は確認したので、パートナーをイメージして準備したい。
- ・私が大切にしたいのは、相手と楽しく過ごすこと。そのために、相手を呼ぶ時は名前で呼ぶ(ずっと身振りと呼んでいたから、何だか開いても楽しく過ごせないと思うから) 質問を10個以上。(英語での会話を通して友達になりたい)
- ・僕は相手の目をよく見て話したり聞いたりしたい。今まで楽しく交流はできていたけれど、積極的ではなかったので、自分から話しかけたい。

大きな変化であると思う。子どもたちの心に確かに交流への考え方が変わったと感じた。何をやるかだけにとらわれるのではなく、どう行こうかということ、何を大切にすることかということに子どもたちの心が動いたのである。

結果的に、交流の内容は、「日本の踊り」・「団子づくり」・「日本の遊びと習字」という内容ではあったが、例年以上に子どもたちの表情は明るく充実したものとなった。

< 2回目の交流を終えた児童の感想から >

- ・今日は待ちに待った国際交流。ぼくのパートナーはキム君。にこにこしていてもおもしろい人でした。一番喜んでくれたのはダンゴ作りでした。「Very Good!」と言って、たくさん食べてくれました。彼が笑ってくれるとぼくもうれしくて、たくさん話ことができました。帰る時には寂しかったけど、最高の一日になりました。
- ・わたしは英語がちゃんと伝わるか心配でしたが、自己紹介をしたり、兄弟姉妹のことを話したりしました。パートナーのナジナーは、けん玉がすごく上手で、教えると連続4回もできました。別れるとき、「今日は楽しかった?」と聞くと、「とても楽しかったわ。」と言ってくれました。たくさん話したり、遊んだり・・・。

みんな楽しそうで良かったと思いました。

【部活動～現地校とのサッカー交流】



海外に暮らす子どもたちにとって、安全上の理由から生活範囲は限られたものになる。比較的治安が良いとされる当地でも、子どもたちは Condominium と学校をバスで往復する生活であり、体力・運動能力が低下せざるをえない現状にある。

こうした現状から、児童生徒の体力・運動能力の向上のために、数年前から小学部・中学部とも放課後の時間を活用して、サッカー・ソフトボール・バドミントンの部活動をおこなっている。中学部はほぼ全員の生徒が、小学部は7割程度の児童が元気に活動している。

そんな中でも、小・中学部のサッカークラブは、現地校のサッカーチームとの交流試合をおこなうことができるようになった。



現地校との交流試合

交流当初は、サッカーの試合そのものに不慣れなこともあり、現地の子どもたちとの交流にとまどいを見せていた子どもたちであったが、何度かの交流を重ねていくうち、貴重な現地との交流の場となっていたようである。

交流試合は、交流していた相手校のグラウンド状況もあり、そのほとんどが、現地校サッカーチームを日本人学校に招いておこなっていた。単に試合をするだけでなく、初めと終わりには、簡単なセレモニー（挨拶や握手、ペナント交換等）もおこない、和やかな交流の雰囲気ができあがっている。しかし、試合になるとみんな真剣そのもの。5・6年チームは、回を重ねるごとに、優れた身体能力をもつ相手チームと互角の試合運びができるようになり、応援の保護者の声にも熱が入った。2年生チーム、3・4年チームもひとつのボールをみんなが一生懸命に追いかける姿を見せてくれた。

試合が終わると、保護者のみなさんが用意してくれたスポーツドリンクをおいそうに飲んでほっと一息。相手校のチームが帰るときは、バ

スが見えなくなるまで手を振って見送る姿が今でも印象に残っている。

現地素材の教材化を視点とした体験的活動 【修学旅行の取組】



ボルネオ島のジャングルトレッキング

小・中学部とも修学旅行は、子供たちにとってやはり一大イベントである。日本では経験できない活動を体験できるという意味で、子供たちの期待感は大変大きいものがある。

ジョホール日本人学校では、小学部児童は5・6年生と一緒に修学旅行に出かける。そのため、目的地は2年サイクルを組んでの実施となっている。半島マレーシア（西マレーシア）と東マレーシア（ボルネオ島）で目的地を選定したサイクルを組んでいる。数年前までは、首都KLとボルネオ島クチンのサイクルを実施してきたようであるが、在籍した3年間では、児童にマレーシアならではのより充実した体験をさせたいとの思いから、一昨年を首都KLに変わって、マレーシア東海岸のコタバル・ペルヘンティアンに変えて実施。目的地までの移動にマレー鉄道を利用するなど、まさにマレーシアでしか体験できない内容となった。

さらに、この実践の大きなポイントは、修学旅行を単発の行事に終わらせないために年間の交流学习との関連を図ったこと、他教科との関連を図った横断的な活動であったことにある。昨年の修学旅行も、この流れを大切にしたい充実した体験活動となった。

～生命との出会いを求めて ボルネオ島へ～



熱帯雨林のジャングル

ジョホールセナイ空港から約1時間半。熱帯雨林と野生動物の宝庫、ボルネオ島が修学旅行の目的地である。ボルネオ島は、世界で3番目に大きな島。世界最古の熱帯雨林

が残り、森の人オランウータンや世界最大の花ラフレシア等の珍しい熱帯動植物の宝庫である。南シナ海に面したサラワク・サバの2州が東マレーシアであり、滞在場所がサラワク州の州都クチン。森の都と言われ、白人王ブルック時代の歴史的遺産と近代建築が融合した美しい街である。クチンとはマレー語で「ネコ」という意味で、市内には世界有数のネコ博物館がある。

修学旅行の取組を始めるにあたって、他教科等との関連を図る観点から、国語科の「生き物はつながりの中に」という学習を通して、命のつながりについての意識をもたせ、そこからボルネオ島やクチンについての調べ学習をおこなっていった。その活動の中から、児童は、命のつながりということとボルネオの自然(動植物)や先住民族の事を関連させて考え、個人課題を設定していった。そして、それらの個人課題を全体で練り上げてできあがった修学旅行の全体テーマが、「楽しもう修学旅行！生命との出会いを求めて」である。教科での学習が修学旅行という体験活動に有意義な方向性を持たせることができるテーマとなった。

そんなテーマをいだいての修学旅行1日目は、人～民族との出会いである。サラワク・カルチュラル・ビレッジでは、今もなお、森と共に伝統的な自給自足の生活を続ける7つの民族の生活にふれることができる。各民族の伝統文

化にふれた経験は、ここで暮らす人々との出会いであった。

2日目は、自然との出会い。サラワク州で最も古い国立公園であるバコ国立公園での体験活動である。バコ村からボートで30分で到着。栈橋のない浅瀬に着いたボートから、裸足で降り立った児童を待っていたのは、マングローブ林と熱帯雨林のジャングル。そして、ボルネオ島にしかない野生動物との出会いであった。ジャングルトレッキングで経験した巨木や熱帯の植物の様子、この島にしかないテングザルとの突然の出会いは、まさに生命との出会いにふさわしい体験活動となったばかりでなく、修学旅行後の他教科の学習に大きな成果となって表れた。

修学旅行3日目は、森の人オラン・ウータンとの出会い。セメング野生動物リハビリセンターは、653 haの熱帯雨林に、放し飼いにされた半野生のオラン・ウータンがいる。残念ながら、餌場に表れる彼らを見ることはできなかったが、1組の親子と出会うことができ、様々な命との出会いを無事に終えることができた。

【遠足の取組】



凧博物館での凧づくり 展示されている日本の凧

現地素材の教材科の視点として、「ここにいるからこそできる」という発想はとても大切である。それによって、ともすればマイナス要素としてとらえがちな素材が、有意義な活動を提供するものになると考えるからである。年2回の遠足の取組は、そうした視点に立って行われた活動である。

1回目は、凧博物館での凧作り体験である。ジョホール・バルには、世界の凧を集めた凧博物館があり、年に1度、世界凧選手権が行われ

ている。博物館には、日本の凧もかざられており、現地の職員の方が凧作りの指導を直接児童におこなってくれる。現地の方との交流も図られ、有意義な時間を過ごすことができた。完成した凧は、大きな芝生の広場に出て、すぐに凧上げをすることができ、楽しい時間を過ごすことができた。



ラヤン・ラヤン公園でカレー作りに挑戦

2回目の遠足は、市内のラヤン・ラヤン公園でカレー作りに挑戦。戸外での炊事は、任期中初めての活動であった。食材や道具、水等の準備・保管・運搬など、大変であった分、火興しからご飯炊き、カレー作りまでを1～6年まで小学部全員が縦割り班で実行できたことに、児童の満足感・達成感は大きいものがあった。熱帯雨林の気候の中で炊事遠足。まさに、マイナスをプラスに転換する活動となった。

日本人会行事への参加～日本文化の発信

毎年1度開かれる日本人会最大の行事、日馬フェスティバル（Japan Malaysia Friendship Festival）。年を追うごとに現地の人たちの参加者が増え、大変にぎやかな行事となっている。背景には、日本人会の方たちの企画力・宣伝力と、日本文化への興味関心の高さがあると思われる。一昨年は、日本の四季をテーマにしたブースを作り、中でも餅つきの体験が大好評を博した。昨年は、日本の冬と題して、熱帯のマレーシアでは経験できない氷のブースを作るなど、現地の人たちの興味を引く内容が多く行われるようになった。



日馬フェスでの南中ソーラン

そんな中で、一昨年から運動会の表現活動として児童生徒とともに取り組んできたソーラン節をこのフェスティバルで披露することになった。初めて見る躍動感のある「日本の踊り」に現地の人たちから大きな拍手をもらい、参加した児童生徒は大きな喜びを感じたことと思う。また、現地の人たちだけでなく、多くの日本人会の方たちから、「涙がでた。」「体が震えた。」など、大変多くの賞賛をいただき、子どもたちだけでなく、指導してきた自分にとっても大きな励みとなった。

4. おわりに

マレーシアでの生活、そして、ジョホール日本人学校での実践について、まだまだ伝えたいことがたくさんある。各民族の祝祭日の様子や食文化、街並みや人々の生活の様子。そして、紹介しきれなかった日本人学校での特色ある活動（少人数による英会話活動、10周年行事）など、本当に多くの貴重な経験をさせていただいた。

そんな中でも一番の財産となったのは、やはり人との出会いである。スポーツを通じて知り合えた仲間、家族ぐるみのつきあいをしてくれた保護者のみなさん、実践をともにつんでくれた同僚や職員、そして明るく元気で、素直な子どもたち。

多くの出会いに感謝しながら、帰国報告を終えたい。

